

【連載企画③】

## 生成 AI×デジタル教科書が生み出す新しい授業！ ～「教科書 AI ワカル」を活用した日比野中学校の実践～

#連載 #日比野中学校 #教科書 AI ワカル #相乗効果 #NEW HORIZON #公開授業



生徒が主体的に学習に取り組む態度を養うために学習方法などを生徒に委ねる——そんな斬新な指導法に取り組んでいるのが、名古屋市中心部にある名古屋市立日比野中学校です。そんな「生徒に委ねる」指導を進める同校の授業中に活躍していたのが、東京書籍が開発している対話型 AI 学習サービス「教科書 AI ワカル」。この生成 AI 教材を活用している学校に取材する連載企画の第3弾では、そんな先進的な取り組みを行っている同校にお伺いしました。そこでは、さまざまなデジタル教材を駆使したり、生徒同士で話し合ったり、教え合ったりしながら、主体的に学びを進めている生徒たちの生き生きとした姿がありました。

## 「主体性を育む探究的な学び」

日比野中学校は、名古屋市の学びの基本的な考えを示した「学びのコンパス」をもとに、令和7年度は最上位目標「楽しいひびの創造」に向けた研究テーマを「主体性を育む探究的な学び」に設定しています。今回は「教科書 AI ワカル」が準拠している『NEW HORIZON English Course』の編集委員である山田誠志先生も授業を参観。そのため、授業を担当された石黒智士先生（1年生担当）は緊張気味です。

教科書の編集に携わっている山田先生は、生成 AI を活用した授業や教材についてどのように感じられるのか。そして「主体性を育む探究的な学び」において「教科書 AI ワカル」はどのように活用されるのか。とても興味がわいてきます！

## 緊張気味でも英語学習に一所懸命！

まずは、石黒先生による1年生の授業です。単元のタイトルは「Think Globally, Act Locally」。井戸に水を汲みに行く子どもたちの状況について考え、自分の意見を英語でまとめていく授業です。石黒先生は、教科書の文章のシャドーイングや本文についてのやり取りなどを通じて、少しずつ内容を深めていきます。見学するたくさんの大人がいたため生徒も緊張気味。でも、一所懸命に英語学習に取り組んでおり、スムーズに授業は進行していきます。



（左）指導者用デジタル教科書を活用する石黒先生、（右上）やり取りをする生徒、（右下）山田先生も熱心に生徒の会話に耳を傾けています。

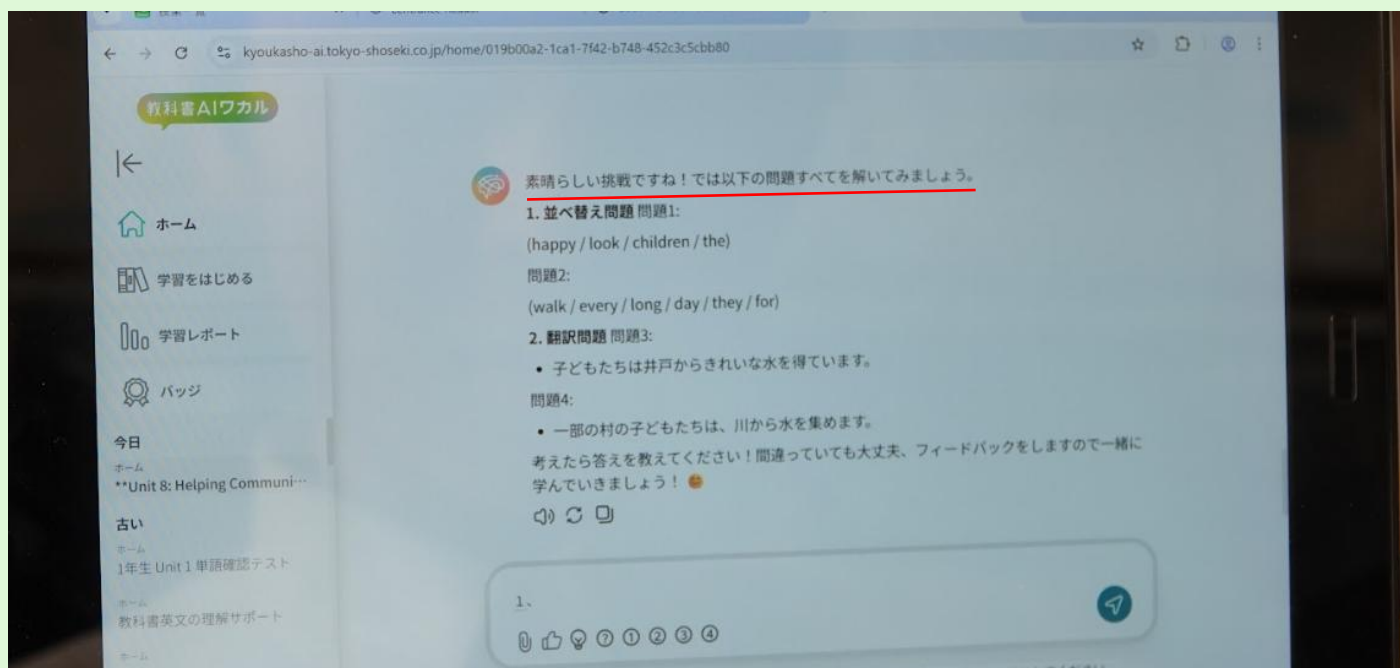
## 生徒に委ねる指導法

授業も中盤になり、石黒先生はワークシートを配布しました。そして本時の目標である「世界で起きている問題を知り、自分たちでできることについて考えるために、ポスターを読んで要点を捉えることができる」を確認。“What help do you do for the children?”を問いかけた上で、「この質問に答えられるように自分で学習を進めてください。時間は20分です」と伝えます。・・・え、に、20分!?

これは「主体性を育む探究的な学び」における、生徒に委ねる指導法の一環でした。生徒にとっては自分に合った学び方を自分で考えて学習を進める時間で、その具体的な方法も口頭で説明されています。「デジタル教科書を使い発音を確認する」「主題を解くために、本文の読解をする」「周囲の友人と相談する」などとともに、「AI ワカルを使い学習を進める」といった声かけがありました。



このような「委ねられている時間」で、生徒たちはさまざまなデジタルツールを使って、慣れた様子で自分なりの学習を進めていきます。特に感じたのが「学習者用デジタル教科書」と「教科書 AI ワカル」を相互に関連付けて学習していた生徒が多いこと。学習者用デジタル教科書を音声の確認なども含めて活用するとともに「教科書 AI ワカル」にはわからないところを夢中になって質問しています。特徴が異なるデジタルツールを使いこなすことで、生徒は効果的な学習を進めているようです。そこに友達同士での学び合いも加わっていきます。



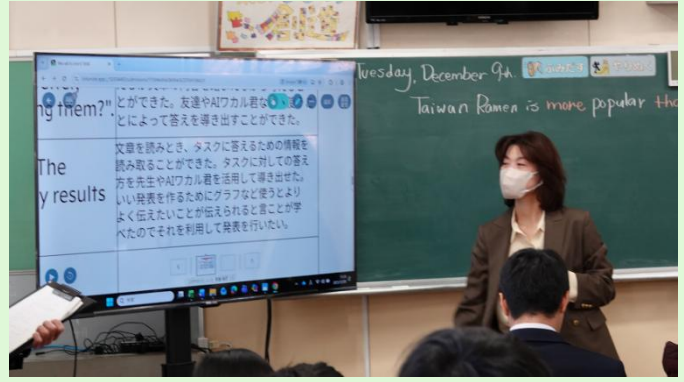
（左上）学習者用デジタル教科書で音声を確認する生徒、（右上）友達と教え合いながら学習を進めます、（下）「教科書 AI ワカル」の画面。生徒に問題を出していることがわかります。

## AI の回答をじっくり読み込む生徒たち

次に見学したのは、飯田澄江先生と鈴木暁子先生の中学2年生の授業でした。単元を貫く問いは「How can we make a good presentation?」で、比較表現を扱う単元です。授業の冒頭は「このクラスではあなかけスパと台湾ラーメンのどちらが人気か」という御当地ネタから生徒もすっかり笑顔に。さすがです。

この授業でも「教科書のキャラクターであるエディのグループの発表にどんなコメントをするか」というタスクに対して、生徒は15分程度で教科書 AI ワカルを含めたさまざまなデジタルツールを活用して自分の考えをまとめていきます。

最後に先生が授業支援ツールで何人かのタスクに対する意見を紹介。自ら入力した質問に対する AI ワカルの回答をじっくり読み込んでいる生徒の姿が印象的でした。



(左) デジタル教材を使いながら学び合う生徒たち、(右) 生徒の振り返りを紹介する鈴木先生。「タスクに対する自分の答えを先生や教科書 AI ワカル君を活用して導き出せた」との生徒のコメントも。

### 「ヒントを教える」ことの大切さ

その答えは、授業後の指導の振り返りの時間でわかりました。石黒先生によると、このような生徒が自ら学び方を選ぶ時間において、「生成 AI をただの答えを導き出すツールとして活用しては学習にはならない」と考えたそうです。そのため、1・2年生共に「教科書 AI ワカル」の設定の中で「中学レベルの英語で回答する」という条件や「ヒントを教える」という項目を盛り込んでいるとのこと。だから、自分の考えをまとめるために生徒は“ヒント”を熟読していたのですね。

ちなみに、それ以外の制限は特に指定せず、「関西弁で話す」や「フレンドリーに回答して」といったような設定を生徒は楽しんでいるそうです。鈴木先生は「教科書 AI ワカルは授業で細かく説明できないことまでフォローしてくれます。そのため『めっちゃわかりやすい』と生徒に言われたときは、教師の立場

として複雑な気持ちになりました」とジョーク混じりにお話してくださいました。

最後は山田先生の講評です。「英語教育の目標は、あくまでコミュニケーション能力の育成。生成 AI はそのためのツールとして活用することが大切です」と説明した上で「教科書 AI ワカル」について「教科書の準拠性などで学校教育の中で安心して使わせられるツールだと思います」と評価。加えて表現したい内容をただ英語に訳させるだけではなく「生徒が作った元の文章と、生成 AI が作った英文の答え合わせをするような、使い方の工夫が必要となるでしょう。生徒のどこが間違ったのか、それはなぜか、と考えさせるプロセスが大切になると思います」と“学ぶ過程”



授業の振り返りを行う山田誠志先生

の重要性を指摘します。

そして最後にこう付け加えられました。「AI の活用がどれだけ進んでも、それを使っておけば意欲や能力が高まるということはきっとない。先生の指導が何よりも大切なのはこれからも変わらないでしょう」

\*\*\*

生徒の主体性を尊重した学びのあり方を追究する先生方と、そのような学びをサポートする「教科書 AI ワカル」。今回の取材でもさまざまな学びがありました。東京書籍は、これからも「教科書 AI ワカル」の効果的な活用法について研究を重ねていきたいと思います！